



TITLE:

紀伊半島における野生ニホンザルの
分布学的研究(主として和歌山県
について)(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

前川, 慎吾

CITATION:

前川, 慎吾. 紀伊半島における野生ニホンザルの分布学的研究(主として和歌山県について)(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1975, 5: 35-35

ISSUE DATE:

1975-12-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162653>

RIGHT:

紀伊半島における野生ニホンザルの分布学的研究 (主として和歌山県について)

前川 慎吾 (海南高等学校)

和歌山県側の野生ニホンザルの分布域並びにその分布密度は、今回の調査により、これまでの奈良県三重県の調査結果からの予想をはるかに下まわるものであることが明らかになった。

分布域は有田川南岸を北限として、それ以南に限定され、しかも、その分布状況は、紀伊山脈から西に流れる主要河川、無制限と思われる自然林の伐採、人工造林等により分断され、互に隔絶され、次のような四地域を形成している。それは、白馬山脈 (A地域)、高尾山一帯無山脈を連ねる山系 (B地域)、椿を中心とする海岸沿いの地域 (C地域)、大塔山系 (D地域) の四地域であるこの分布地域は即自然林の分布状況を示していると考えてよいと思われる。

今回の調査及びそれ以前の調査により、これまで確認あるいは推定されている群、および個体数は次の通りである。A地域で8群、240~260頭、B地域で5群、150~180頭、C地域で3群、180頭 (この中に餌付けされている椿の群れ、110~130頭が含まれている)、D地域は34群、930~1,080頭 (但し、この数字は調査不充分のため、川村と筆者との間で、一部重複している可能性がある)。調査をしてみても、和歌山県、奈良県、三重県とも、県境における開発 (伐採、造林) が急速にしかも大規模に進められているのが明らかになり驚いている。ことに和歌山県側において、県境 (奥地) からの開発と、海岸線側からの開発が同時に進められ、ニホンザルの生息条件が時々刻々せめられて行っていることは注目すべき点であると思える。

ニホンザルの生活史とその生息環境に関する比較生態学的研究¹⁾

木村 光伸 (日本モンキーセンター)

ニホンザルが、現在生息している環境条件に対してどのような適応形態を示し、かつそれが彼ら自身の生活にいかんにか反映しているかを生態学的に考察するために、主として越冬期の白山で daily activity の観察・測定を行い、前年度までに得ている幸島群の data との比較を試みた。feeding, resting, locomotion 等に費される時間は幸島群では比較的明確な3山型の pattern を示すのに対して、越冬期の白山 (カムリA群) では、日毎の変動が大きく、pattern 化すること自体、無意味であると考えられ、安易に daily rhythm を測定し pattern 化

すればザルの行動が理解し得ると考えることに対して否定的な結果を提供した。

越冬期の白山カムリA群に明確な daily activity pattern がみられなかった理由の一つとして、彼らの生活が毎日の天候、特に降雪に大きく影響されていることがあげられる。例えば1日の遊動距離は普通0.5—2.0kmであるが、激しい吹雪の日には全く移動しないことがしばしば観察される。そして極端な場合には彼らの食物は自分の stay している木の樹皮と冬芽等に限定されてしまい、一本の樹木が完全に裸にされてしまうことさえ生ずる。このような条件下では、移動—採食—休息の pattern は完全に崩壊しているといえる。

また、半地上性といわれるニホンザルが森林内でどのような位置にいるのかを地上・樹上別に記録し分析した結果は、越冬期の白山と幸島で大きな違いを示した。grooming は、幸島では圧倒的に地上で行なわれた (88.1%) のに対し、白山では全く逆転した結果 (地上で12.5%) となった。また、sitting をみれば、幸島では地上63.2%であるのに対し、白山では樹上88.2%となり、積雪の影響を強く表わしている。一方、feeding に関しては幸島 (86.5%)、白山 (82.3%) と、どちらもほぼ同程度に樹上に固執しており、気象条件や植生型等の自然環境の違いを越えた食性の共通性を示した。

上記の比較からニホンザルが日本列島の多様な環境に極めて個別的に適応しつつ生活していることが明らかであるが、なお越冬期以外の冬季節の白山、および幸島・白山と異なる環境構造を有する地域での調査を重ねる必要がある。

香春岳におけるニホンザル野生群の生態学的研究

池田 啓 (九大・理)

江口 和洋 (同上)

この群れは1974年2・3月に半数以上の53頭が捕獲された、残された群れの行動域の利用パターン、個体数等が捕獲前と比べどの様に変化するのか、これらの点を中心に調査をおこなった。調査は、1974年6・11月に各2週間、1975年1月に8日間実施した。

調査を始めまず気づいたのは、捕獲前に比べ群れが静かになったことであり、声・姿が確認できるのが1日に1度、それも数分間という場合もあった。このため追跡が困難となり、個体数も十分にカウントする機会が少なく、6月に4回、1月に2回その機会を得たがいずれも数え落しがあると思われる。このうち最大数を数えた6月24日のデータでは、A♂1、YA♂3、A♀11、4才5、3才3、2才3、1才1、4、合計31頭であった。新生児の最大数は、1月29日にカウントした6頭であっ

¹⁾ 調査費の一部は石川県の援助による